

はじめに

近年、自信のない子ども、やる気のない子どもが増加している。しかしながら、幼児体育教室で活動している際、自信がなさそうにしている子どもが、先生の姿を見てから次第にやる気を出して取り組もうとする様子を目にした。このように、幼児期において、子どもたちが他者の影響を受けて、自分のやる気や自信が強くなることは本当にあるのだろうか。そこで本研究では、幼児期における自信や憧れに関する理解を深めるとともに、憧れと自信・やる気との関係性を、運動・スポーツ場面に焦点を当て、アンケート調査を用いて明らかにしていきたい。

第一章 文献調査

(1) 自信について

自信とは、「自分には能力があるんだ」といった、自分に対する肯定的な評価からくる感情のことを指す。自信をもっている子どもは、情緒が安定し、逆境にも強いと指摘されており、自信のない子どもはその逆であるといえる。また、成人・青年期など、その後の行動や考え方にも違いがみられる。そのため、家庭や学校、そして地域社会で生きていくために、子どもの自信を保てるようにすることは重要なことなのである。

さらに、自信は幼児期から形成され、児童期の初期には確立されてしまうといわれている。そのため幼児期に自信の基礎を築くことは必要なことであり、幼児期に獲得された自信は、学童期以降においても自分自身で積極的かつ意識的な態度に満ちた生活を主体的に創り出す土台になると考えられている。

(2) 憧れとは

憧れとは、「理想とする物事に強く心が引かれる」と、同一視と同じような意味となる。しかし、同一視とは従来、不安を解消する目的としてみられており、湯川（1974）により「同一視とは、ある個人がある特定の他者に対して抱く共感的な親和感情とそれに基づいた自発的模倣行動」と定義され、初めて「憧れ」の概念を理想的他者への同一視という概念に変換した。

さらに、教師への憧れ（同一視）が、学習への内発的動機づけを高める可能性が明らかにされ、また同一視の強さが学習意欲ときわめて高い関連を示すことが明らかになっている。このように、学習面において、他者への憧れがその子どものやる気へとつながっていることがわかっており、そのため、幼児期の運動・スポーツ場面においても同じようなことがいえる可能性があると考えた。

第二章 アンケート調査

本大学に通う大学生 210 名を対象として、質問紙によるアンケート調査を実施した。(平成 24 年 11 月中旬～下旬)

幼児期の運動やスポーツにおける憧れと自信との関係について調べるために、運動に関する自己決定動機づけ尺度と、運動・スポーツ同一視尺度を基に質問項目を作成し、アンケートを行った。

①影響を受けた人物および時期について

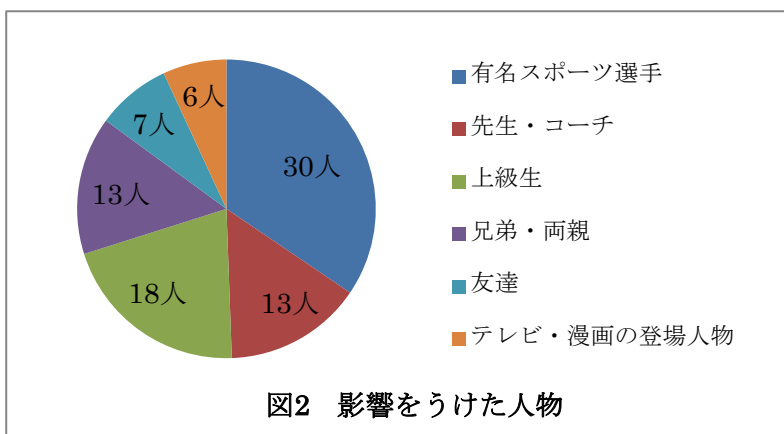
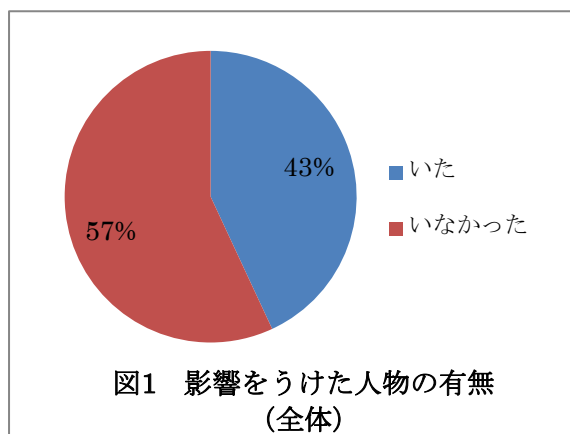
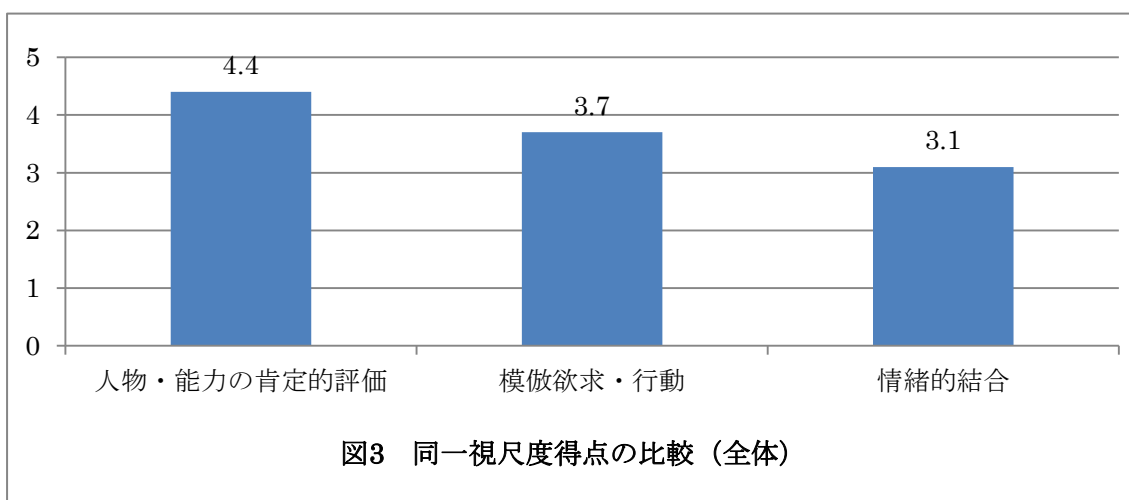


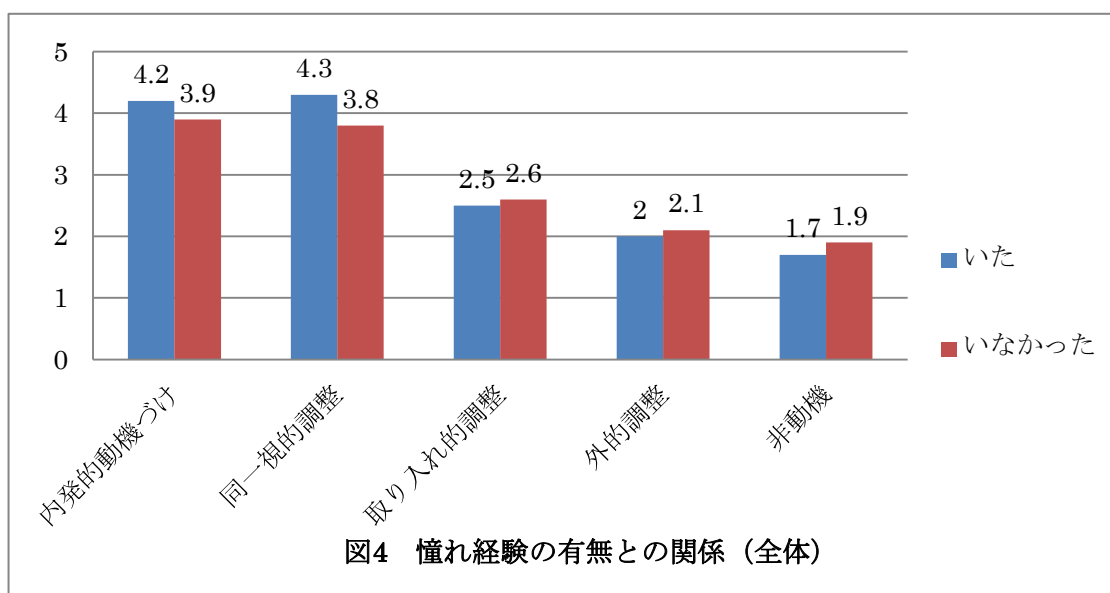
図 1、図 2 から、幼児期に運動やスポーツを行う上で強い影響を受けた人物がいた人は、約 4 割程度であり、対象となる人物は、自分より年長者が多いことがわかった。また、先生・コーチ、上級生、兄弟・両親など子どもとの関わりが多い人の占める割合が多く、子どもたちにとって身近な人物の方が憧れの対象者になりやすいことがわかった。

②影響を受けた人物への印象



①で影響を受けた人物がいた人は、その人にどのような印象をもっているのかを調べた。質問内容を、熱意がある、意欲的に取り組んでいるという「人物・能力の肯定的評価」、プレーを真似する、その人のようになりたいという「模倣欲求・行動」、仲良くなりたい、好かれないという「情緒的結合」の3つの項目に分けて集計したところ、図3からわかるように「人物・能力の肯定的評価」が一番高いという結果になった。つまり、憧れの対象となる人物にとって必要なこととして、ただ単に運動能力が高いというだけでなく、それよりも運動やスポーツに対して熱意があったり、情熱をもって取り組んだりしている様子が見られ、尊敬できるような存在であることが重要であることがわかった。そのため、教師や保育者、親たちも、子どもの憧れの存在になることは十分可能だといえる。

③憧れ経験の有無と現在の自己決定との関係



憧れの経験がある人となない人では、現在の自己決定に違いがあるのかということ調べた。その結果、「内発的動機づけ」と「同一視的調整」の項目に少し差が見られた。この2つは、運動やスポーツをすることの価値や目的をしっかりと自分の中にもっていることである。つまり、憧れ経験のある人は、運動する動機がなかったり、周りの人から言われて運動したりするのではなく、運動やスポーツをすることの目的をしっかりと自分の中にもって、意欲的に取り組んでいるということがわかった。そのため、憧れの経験があることによって、運動・スポーツへの関心・意欲が高まり、子どものやる気や自信へとつながりやすくなると考えた。

まとめ

本研究を通して、幼児期の憧れと自信について見つめ直し、また、子どもたちと関わるときに、私たち大人がどのようにしたらよいかを考えることができた。そしてそこから、私たち大人が子どもたちにとって憧れの存在となることができれば、その子どもたちの自信ややる気を引き出せる可能性があるということがわかった。そのため、子どもたちと多くの関わりをもつ保護者や保育者、教師たちは、自分たちが子どもに大きな影響を与える存在であることをしっかりと理解し、自覚をもって接したり、行動したりすることが大切なのである。

引用・参考文献

『運動・スポーツ場面における同一視と動機づけの関係』 上地広昭（2011）

『自己決定理論に基づく運動継続のための動機づけ尺度の開発：信頼性および妥当性の検討』 松本裕史 竹中晃二 高家望 （2003）

『子どもの社会的行動の形成に関する研究』 森下正康（1996）風間書房

『日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか』 古荘純一（2009）光文社

『なぜ自信が持てないのか 自己価値観の心理学』 根本橋夫（2007）PHP 研究所